

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

4つの約束 (巻頭エッセイ)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 関, 雄二 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008349

4つの約束

関 雄二（国立民族学博物館教授・アンデス文明研究会顧問）

昔、ちあきなおみが歌い一世を風靡した曲にあやかるわけでもなく、また日本においてこの数が持つ差別的意味を知らないわけではないが、その日、パコパンパ遺跡に集まった人々の前にした挨拶で自然と口に出たのが、ようやく果たすことができた4つの約束であった。

2014年10月3日、ペルー北高地に位置するパコパンパ遺跡で、調査終了前に毎年行う恒例の行事である遺跡説明会を兼ねて、保存処理を施した遺構のオープニング・セレモニーを開いた。雨期も近づき、時雨れる日が続く中、幸いにも遺跡を見下ろすその日の空は曇天で、泣き出すのをどうにかこらえてくれたようだった。

例年通り7月から始めた発掘調査と並行して、今年初めて試みたのが、遺構の保存であった。遺跡の保存には困難がつきものである。現在、文化遺産を担当する文化省が勝手な保存を許さないため（これはこれで正しい）、かなり細かい計画書の提出が義務づけられ、許可をとるのにも時間がかかる。平面図の他にも遺構の壁一つ一つの立面図、保存材料のリストアップ、具体的な保存処理の方法、使用する材料の実験結果など、微細にわたる項目を申請書に盛り込まなくてはならない。

よしんば許可が出たとしても、それだけ細かい作業をやり遂げるためには、材料費や人件費がかかることは必定である。東京ドーム1つ分の大きさを持つパコパンパ遺跡で、保存をしようものなら、ゆうに1億円以上は必要となる。それも数ヶ所の遺構を選択した場合の数字である。もちろんこんなお金はどこにもない。そこで、今回は、調査団員のボランティア、そして鉱山を所有する多国籍企業からの援助をかき集め、遺跡の中心部に築かれた中央基壇だけを保存対象とした。この遺構を選んだ理由は、2009年に中央基壇直下で金製品を伴う、いわゆる「パコパンパの貴婦人」の墓を発見したからである。

そろそろ約束の話に戻ろう。4つのうちの1つは、国立サン・マルコス大学と結んだ約束である。10年前、遺跡の持ち主である大学と協定を締結した際、附帯文書に遺跡の保存を実現することを明記し、長らくその項目が頭から離れなかった。調査初年度から、早く保存をせよと責められてはいたが、まずは研究し、その結果をもって保存する遺構を決めますと説明してうまく逃れてきた経緯がある。しかし10年経てばその言葉も耐用年数が切れ、自分としても約束を果たす時期が来たと認めざるを得なかった。

2つ目は村人との約束である。調査を開始した頃、作業員を選ぶのに苦労した。雇用できる作業員数が、村の働き手の数をぐっと下回るほどの情けない予算状態にあったからである。作業員の選出は、調査団が勝手に決めるのではなく、

村会議に委託していた。長時間の議論の末に決まったのは、私の推薦（発掘経験者）、貧困家庭の優先、そしてくじ引きという3つの選出方法の組み合わせであった。

調査2年目の村会議で、選に漏れたある村人が終了直前に手を挙げた。まだ不満があるのかと思いきや、意外な発言が飛び出した。「自分は作業員には選ばれなかったが、1つお願いがある。遺跡に置かれた石彫が雨で浸食されている。是非屋根をかけてほしい。そして、どうか村の宝であるパコパンパ遺跡を保存してほしい。」長時間の会議に癡壁し、はやく閉会してほしいとばかり考えていた私は、自分を大いに恥じた。以来、保存は村人との約束になった。

そして3つ目は、「パコパンパの貴婦人」との約束である。2009年9月2日から3日にかけて徹夜で金製品を副葬した立派な墓を掘った。3日の午前零時、周りで私の発掘を見守る（墓には一人しか入れない）団員は、休憩を促し、偶然の巡り合わせとも言える私の誕生日を祝福してくれた。私はグラスに注がれた酒を口にする前に、墓穴の周囲に数滴垂らし、心の中で被葬者に語りかけた。「このひとときをあなたと共有したい。あなたの眠りを妨げてしまい、申し訳なく思っている。丁重に扱い、きちんとした研究成果を世に出すことを約束するから、どうかあなたの身体を取り上げることを許してほしい。」論文はすでに出した。あとはこの墓が存在した中央基壇の保存だけが課題であった。

そして4つ目の約束となる。これは自分に対するものであった。考古学と並行して手がけてきた文化遺産の保存と活用に関する研究は、いまや私のライフワークといってもよい。文化遺産を広く地域住民とともに保存し、活用していくべきだという主張は、もはや信念に近いものとして心に深く根を下ろしている。だからこそ国際協力機構や国際交流基金、NGOなどの機関とともに、これまでさまざまなプロジェクトを展開してきたし、東日本大震災後の文化遺産のあり方を模索する会議の場でも同じ主張を繰り返してきた。ところが、こと研究の主戦場であるパコパンパにおいては、調査に村人の自主性を取り込むようなシステムを築くことか、遺跡説明会くらいしかやっていない。信念ならば、なぜお膝元のパコパンパで実行しないのか、自分でももどかしさを感じていた。いつかやるという自分に課した約束の一部を今年実現したことになる。

セレモニーの終了後、私に祝福のハグをする村人の目に浮かんだ涙を見て、達成感とともに、これがまだたったの一步でしかないことを思い出した。道のりは長く険しい。ペルー人の団員の一人が、あのすばらしい演説はいったいつ考えたのかと尋ねてきた。朝のトイレで思いついたなんてとても言えなかった。